

# 林文會堂義端年譜稿(下)

——宝永元年以降——

中 嶋 隆

宝永元年申年

○七月、『扶桑名賢詩集』を編集し、序・凡例を附して刊行する。

寶永甲申孟秋月／文會堂林九成梓〈狩古内早〉

『扶桑名賢文集』の続編をなす。両書とも、刊記は、蓮牌木記で囲まれている。

○七月二十日、「喜多藤右衛門」を古義堂に紹介する。

喜多藤右衛門 林九兵衛同道(納礼志)

○秋、岡島冠山に『皇明英烈伝』と『水滸伝』の訳解を依頼する。

岡島玉成子という者有り(略)頃歳、京師に來遊す。余偶然邂逅し、書を挟んで討論す。去秋、英烈水滸二伝を訳解して世に行んことを請ふ(略)。(通俗皇明英烈伝 序文)

宝永二乙酉年

○正月、『三元彩毫』を編集し、出版する。

宝永歳旦詩集并和歌／(略)文會堂主人謹題(離波詩林乙酉歳)

○正月、跋文を附し、『通俗唐玄宗軍談』を出版する。

寶永二年孟春吉旦／書林／吉田勘右衛門／林九兵衛／植村藤右衛門〈早〉

本書の序文は、村田通信が記している。

○三月、序文を附し『通俗皇明英烈伝』を出版する。

寶永貳年三月吉日／川勝五郎右衛門／林九兵衛／吉田勘右衛門〈早〉

今春、英烈傳先づ成て、梓に登す(略)寶永乙酉春三月望日／京師書坊林義端九成撰(通俗皇明英烈伝 序)

宝永三丙戌年

五月、毛利元次の命をうけ、『徳山名勝』を出版する。

寶永三年丙戌／仲夏望日／京城書肆 林九兵衛梓行

典故籍を業とするを以て、誤りて謁見を許さる。過差之寵、喜懼に任すること無し。往歳命を蒙て、徳山名勝巻を鐫る(略)。(徳山雜吟 跋)

この書物には、東涯の序文の他、宇都宮遷庵の「棲息堂記」

「松屋十八景詩并序」、桂敬義の「松屋十八景記」、長沼玄珍「徳

山府記」それに毛利元次の「遠石記」が収録されている。

宝永四丁亥年

○六月十三日、東涯・梅字等と、大阪毛利元次邸を訪れる。

。六月十三日重蔵令同道大坂いたち堀毛利飛彈守殿屋敷へ

罷越(略)長沼玄珍取持被申候而十蔵事飛彈守殿へ勘上相

濟四五年も殊在京学問動候其内に五人扶持被置候様極り

候其段礼申遣候田中盤林九兵衛同道にて罷越候(略)(伊藤

氏家乗)

(注ヨ) 伊藤梅字(注チ)。

(注タ) 毛利元次、字善長、号徳山愚人、享保四年歿、五

十三才、徳山藩第三代藩主。

(注レ) 長沼玄珍、号常庵、享保十五年歿、徳山藩馬廻格

医。

梅字が、毛利徳山藩から、在京のまま五人扶持を受ける事が決まったので、その礼言上のため、東涯は、義端等同行し、大阪毛利邸で、二名の留守居役に面会している。梅字が五人扶持を受けた事は、徳山藩側の資料である『徳山略記』の次のような記事と一致する。

京都儒者伊藤源蔵弟同重蔵五人扶持被下置後年学文弥相

励、御用被召仕候節御了簡可被仰渡候(徳山略記 宝永四

年六月の条)

また、『伊藤氏家乗』には、「長沼玄珍取持被申候而」とあり、両者を仲介したのは、徳山藩の御馬廻医師で、はじめ道安のち常庵と号し、元禄十七年より古義堂に入門した長沼玄珍であ

る事がわかる。

○十月、北村可昌、伊藤長胤等著『古學先生碕銘行状』に跋を附

し、出版する。

寶永四年龍集丁亥季秋穀日／古學先生／碕銘行状／書房林

文會堂藏版(扉)〈国符〉

幾嘗て其門に學ぶ。先生、愚賤を以て棄てず。諄諄として

教誨す(略)。寶永丁亥孟冬望日／京師書房林義端九成拝撰

(古學先生碕銘行状 跋)

刊記によれば、「季秋」(九月)の出版だが、義端の跋文には

「孟冬」(十月)とあるので、実際には十月に刊行されたのであ

らう。『伊藤氏家乗』にも「十月。此頃林九兵衛にて先生行状

板行出来なり」と記されている。

宝永五戊子年

○三月五日より、東涯等と同行し、大阪に下る。東涯・梅字は、

九日に毛利元次と謁見する。

三月五日未後 重蔵 中江快庵 岡田又玄 林九兵衛父子

令同道大坂へ罷越候 是へ重蔵事去夏毛利飛彈守殿合

力扶持成候 重蔵目見并拙者も御逢可在之段長沼玄珍申

来候ニ付如此候(略)(伊藤氏家乗)

○戊子三月五日 自伏見易舟到大坂(七絶) 伊藤長

胤 (徳山雜吟)

三月六日、旦 大阪八軒間屋に着 道守町ニテ和泉屋弥右

衛門と申方へ着申候(伊藤氏家乗)

○六日平明到大坂塙頭(七絶) 伊藤長胤 (徳山雜吟)

三月七日、八過毛利殿大坂へ着 八日ハ御精進日并國之忌日故何も謁見も無にて河御座船見物申候様ニ御申付見申候(略)(伊藤氏家乗)

○敬題河舫號住吉丸(七絶) 義端

命じて東涯子兄弟をして河舫を周觀せしむ。僕之至賤なるも亦相隨ふことを許さる(略)。(徳山雜吟)

○廣林義端題河舫芳韻并序(七絶) 長沼玄珍

洛陽東涯子と林義端と俱に來りて、吾主を難波の旅館に見る。一日同く河舫を觀る。義端、一詩を賦して予に贈り、以て其意を謝す(略)。(徳山雜吟)

八日夕快庵又玄令同道築山泰安宅へ話に罷越候 薄暮に本町橋にて東北に大火之氣見へ申候 京辺の火事かと訝越候

泰安へ罷越候へハ京都姉小路油小路より出火東へ焼申候由飛脚便申來り候早速京へ書狀遣候(伊藤氏家乗)

○紀事(七律) 伊藤長胤

寶永戊子三月八日午後左京姉小路油小路民家伊勢屋失火

(略)。予時に弟長英を携て、毛利侯と大坂にて謁す。八

日夕、一友を本町に訪ふ。橋上東北を望むに火氣有り

(略)。(紹述先生文集 卷25)

三月九日 毛利殿大坂屋鋪へ罷越令謁見候 次に重藏も目

見相濟申候(略)(伊藤氏家乗)

前年の大阪毛利邸訪問と同じように、長沼玄珍が仲介して、江戸に向かう途上の元次と、東涯等は大阪で謁見している。この訪問については、既に、柳渡辺両氏が言及されているので、

『伊藤氏家乗』の記事を中心に、簡単に説明する。三月五日、

東涯・梅宇・林九兵衛父子等は大阪に向かう。『伊藤氏家乗』には「長沼玄陳23より申來候ニ付如此候」と記されているので、この謁見も玄珍がとりもっている事は明らかである。六日の早朝、

大阪八軒屋に到着。翌七日には、元次が大阪屋敷に着き、「住吉丸」という御座船の見物を命ぜられる。『徳山雜吟』には、

この時作られた義端や長沼玄珍の詩が、収録される。八日、東涯は築山泰安宅へ出かける途中、京の大火に気づくが、この日の事は、『紹述先生文集』に「紀事」と題し、記されている。

そして九日には、東涯・梅宇は元次との謁見をすませる。

○十二月、元次に命ぜられ、東涯点校『塩鉄論』を出版する。

寶永五年戊子臘月朔旦ノ京東洞院通夷川上町ノ林九兵衛繡

梓へ古宮

頃先父、斯書を稱するを聞く。資を損じて刊行し、予に命じて點校せしめ且つ之が序を徴す(略)。寶永戊子三月日

伊藤長胤序(塩鉄論跋)

僕に命じて資を損じて、校書を印行し、以て先生の志を継ぐ(略)。(義端「読塩鉄論」 徳山雜吟所収)

宝永六己丑年

○四月、元次帰途の際、伏見で玄珍と再会する。

重題河舫(七絶) 林義端

己丑孟夏長沼丈、徳山侯の帰任に従て伏見に來る。僕曉を冒し、雨を衝て、往て之を迎ふ(略)。(徳山雜吟)

○九月十六日、妻「英寿」(堀崎氏)卒す。享年三十三才。

○この年、岡島冠山撰『俗文音訳』の序文を記す。<sup>(2)</sup>

宝永七庚寅年

○一月に「河坊住吉丸記」、二月に「題徳山雜吟後」、八月に「説塩鉄論」を記し、『徳山雜吟』を編集して、この年に刊行する。

寶永庚寅新刊／徳山雜吟／京師書林文會堂繙梓（原）〈古

国内〉

洛の書坊林義端、徳山侯侯姓は大江山は元次字は徳山侯と號すの雜詠并に諸

の次韻を輯め、又時賢命に應ずるの瓊藻を附して、以て一

巻と爲し、名て徳山雜吟と曰ふ（略）。寶永六年己丑至日／

洛陽中島義方序（徳山雜吟 序）

正徳元辛卯年

○五月八日卒す。享年未詳。

前述したように、義端の墓は仏光寺廟にあり、正面に「九成

居士林君之墓」裏面に「正徳元辛卯年五月八日／林 九兵衛」

と刻まれている。この墓碑銘によれば、義端は五月八日に歿し

ているが、古義堂文庫の『伊藤氏家乗』には、「五月十日、林

九兵衛死」と記されている。『伊藤氏家乗』の正徳元年の項は、

九月、十月、五月、八月、十月と記述がとんでいるので、五月

の記事は、恐らく、東涯が何か月か後に記したもので、二日間

の誤差は、東涯の記憶違いによるものではないかと思う。<sup>(3)</sup>

義端の生年については未詳である。ただ、瀬尾用拙斎編『八

居題詠』附録に載る義端の「試毫」と題する詩に「老鏡今朝四

十年」とあるので、四十才以上生きた事は確実である。また妹

の「妙慶」が、延宝七年に十三才で死んでいるので、少くとも、

妹の生まれた寛文七年より前に生まれた事も、確実であろう。

正徳二年以降

正徳元年に、初代林九兵衛義端が歿したあとも、二代目以降の

林九兵衛によって、出版活動が続けられている。ここでは、正徳

二年以降の林九兵衛店刊行書と、歿後に、義端の詩が入集してい

る詩集等を、管見の範囲で取り上げることにする。

正徳二壬辰年

○九月、仁斎述『論語古義』を、瀬尾源兵衛（奎文館）と相版に

て出版する。

京師書坊／文會堂／奎文館／發行 〈内早〉

正徳四甲午年

○正月、『三元彩毫』を出版する。

東洞院夷川上町／林九兵衛梓行

享保六年辛丑年

○四月、瀬尾用拙斎編『八居題詠』附録に、義端の詩（七絶）が

載る。

試毫 文會堂姓林名義端字九成京師書坊

老鏡今朝四十年 走三奔世事轉茫然

説鈴於我取三揚子 何日閑吟且染天

享保十三戊申年

○正月、『忠義水滸伝』を出版する。

享保戊申孟春望日／京師書房 林九兵衛 〈符古鈴〉

延享二乙丑年

○正月、『三元彩毫』を出版する。

林九兵衛板行

寛延二己巳年

○三月、岡白駒著『世説新語補鱗』を出版する。

寛延二己巳歳三月発行／林九兵衛／風月莊左衛門〈鈴〉

宝曆七丁丑年

○岡嶋冠山訳『通俗忠義水滸伝』上編を出版する。

玉枝軒（権村藤右衛門）、再昌軒（吉田四郎右衛門）、文泉堂（林権兵衛）、文会堂（林九兵衛）等刊。（石崎又造氏

『近世日本に於ける支那俗語文学史』

宝曆九己卯年

○五月、『忠義水滸伝』第十一回至二十回を出版する。

宝曆九年五月 京都林九兵衛、林権兵衛板（石崎氏前掲書）

書）

宝曆十二壬午年

○三月、桃井源蔵著『世説新語補考』を出版する。

宝曆十二壬午歳三月／京師 書林／東洞院通夷川上ル町

林九兵衛／間之町通御池上ル町 林権兵衛／二條通衣棚角

風月莊左衛門〈加鈴内〉

宝曆十三癸未年

○正月、『三元彩毫』を出版する。（中野三敏氏『日本古典文学大

辞典』歳旦詩集の項）

明和元年申年

○東所、『論語古義』改訂のため、林権兵衛を相談相手に、板の

持主である林九兵衛、瀬尾源兵衛と交渉する。（中村幸彦氏『古義堂の蔵板に関する文書について』ビブリア23号）

明和八年卯年

○六月刊、江村北海著『日本詩史』に、義端について記される。

瀬尾維賢（略）是に先だつに林義端、字九成は、頗る翰墨

を事とする。其詩、千家詩及び八居題詠附録に見る。亦京

師書林にて文會堂と稱する者なり。（日本詩史 巻3）

○十一月、菅沼梅莊述『婦女決』を出版する。

明和八卯霜月／江戸日本橋通壹町目 須原茂兵衛／京寺町

通松原下ル町 梅村三郎兵衛／京東洞院通夷川上ル町 林

九兵衛〈国〉

安永元壬辰年

○十二月、『通俗忠義水滸伝』中編を出版する。

玉枝軒、再昌軒、文会堂、文泉堂等刊（石崎氏前掲書）

安永八己亥年

○正月、『世説新語補』を改刻し、出版する。

元禄七年甲戌八月吉日／安永八年己亥正月吉日再刻／京東

洞院通夷川上ル町／林九兵衛梓行〈早〉

弘化四丁未年

○八月序、友野霞舟撰『熙朝詩書』に、『徳山雜吟』所収の義端

の詩二篇が載る。

林義端 字は九成、文會と號す。京師の人。書を寫ぐを以

て業と為す。頗る翰墨を事とする。

敬題河舫名在吉九（七絶） 重題河舫（七絶）

刊年不明

○養庭東庵述、雲庵記『医学授幼鈔』を出版する。

養庭東庵先生門人雲庵述／醫學授幼鈔／文會堂藏版（原）

〈京職富〉

注(19) 東北大狩野文庫本の刊記は、「川勝五郎右衛門」の部分

が、「河南四郎右衛門」と記される。早大本は改裝本だが、狩野文庫本の外題は、「通俗元明軍談」である。

(20) 柳牧也氏「書肆・林義端考」(注(5))より引用する。

(21) 長沼玄珍の略歴については、上村幸次氏『毛利元次公所藏漢籍書目』解説による。

(22) 柳牧也氏前掲論文(注(5)) 渡辺憲司氏前掲論文(注

(8))

(23) 子とあるのは、仏光寺廟の義端の妻「楊崎氏英壽」の墓石裏面に「寶永七年庚寅九月十六日／孝子林九重郎建焉」と刻まれる「林九重郎」のことであろう。

(24) 筆者未見。上村幸次氏『毛利元次公所藏漢籍書目』に、

「この書物は從來未見の写本であるが、その序文は先にも引いた京都の林義端の作で、宝永六年に誌されたものである。」と紹介されている。

(25) 義端の歿年については、他に、佐野正巳氏が「正徳三年五月三日に没している」(『詞華集日本漢詩』第一巻解説)と書かれるが、何を根拠にしているのか明記されていない。

(補記) 本稿は、昭和五十九年度日本近世文学会春季大会における口頭発表に加筆したものである。本稿で名をあげた図書館・文庫と、資料閲覧に御高配をたまわった石川真弘・木村三四吾・小池一行・松野陽一・八嵐正治諸氏、および種々御教示いただいた大橋正叔・雲英末雄・白石良夫・神保五弥・谷協理史・徳田武・日野龍夫諸氏に深く感謝申し上げます。なお義端が了意の『狗張子』の原稿を入手するのに、村田通信が介在した可能性があるという点については、坂巻甲太氏に教示を得た。また仏光寺本廟の薬井信恒氏には、数度にわたり御協力いただいた。記して深謝申し上げます。

寄贈圖書(59年12月)

源氏物語主題論—宇治十帖の世界—

鷲山茂雄氏

歌集—花むしろ

奈良国文学研究室

永治二年本古今和歌集

虚往実帰—井上靖の小説世界—

元禄京都俳壇研究

小林素三郎氏

顯昭 拾遺抄注・顯昭 散木集注

草野心平研究序説

上坂信男氏

連歌資料のコンピュータ処理研究

声点注記資料ならびに声点付簡集索引

圖書叢書刊 夫木和歌抄二

宮内庁書陵部

付連歌作品目録・翻刻一覧

秋永一枝氏

国文学研究資料館

森嶋外 於母影研究

慶應義塾大学 国文学研究会

退任記念 国文学論集